



illustration: Tanaka Yasuo

PCが生み出す 新教育

高校における
パソコン活用の
可能性

文部省の調査によると、平成9年3月末の時点で、公立高校におけるパソコン普及率は100%、校内LANの設置も60%を超えている。しかし、生徒指導や校内業務処理においてパソコンが十分に有効活用されているか、また、将来どのように利用しているか、としているか、その状況については高校によりかなりの差があるようだ。

進路指導での活用

ネット上で
興味を深め、
自分に合った
進路を探す

進路指導の第一歩は、生徒が視野を広げ、自分自身の志向を発見することである。生徒が今、どんなことに興味・関心を持っているか、将来大学などで深く学んでみたいと思っているテーマはなにか、HRなどの時間を使って、生徒にレポートなどを書かせ、発表させている高校も多いはずだ。

インターネットを利用すれば、生徒は自分の興味にまつわるさまざまな情報を得ることが出来る。生徒が関心を持っているテーマ(キーワード)に関連する情報を提供しているホームページ(H.P)を、インターネットの検索エンジン(リンク集)で探してみる。インターネットから収集できる情報は実に膨大で、また雑多である。生徒は自分の欲しかった情報に出合っただけでなく、関連するHPで今まで知らなかった情報に出合っこともあるだろう。こういったさまざまな情報との出会い

から、生徒は視野を広げるだけでなく集めた情報を取捨選択し、欲しかった情報をさらに自分にとって役に立つように分析する力を身につけていく。

情報収集の作業は生徒自身に行わせるようにしたい。進路指導の取り組みのポイントは、生徒が自分の頭で考え、本人が納得できる結論を自分で導くようにさせることにある。生徒の主体的な取り組みが必須である。インターネットに接続可能な端末が教師用しかない場合、放課後に生徒に開放するなどして、生徒に使用させる工夫を考えたい。

HPで自分の関心のあるテーマについて調べたら、生徒に「初めてわかったこと」「意外だと感じたこと」「さらに調べたいと思ったこと」などを各自でまとめさせることがよい。また、疑問に思ったところを情報発信者(H.P)の管



理者)に直接質問させることもできる。生徒にとってHPはただ漫然と眺め、情報を引き出すだけのものになりがちだが、これによって情報の確実な定着が図れるはずだ。

社会人との メール交流で 職業観を育成

興味のあること、やってみたいことなどが具体的にイメージできたら、社会には自分の興味・関心に近い職業がどれだけあるのかを調べさせる。インターネットの検索エンジンを利用したキーワード検索で、自分の興味あるテーマに関する職業、企業などが見つかる。この場合も、調べた職業について生徒各自にまとめさせる機会を持たせたい。

職業観の育成には、社会で働いてい

パソコンを活用した 高校の進路指導事例

各大学のHPから情報収集

日本国内の大学だけでなく、海外の大学の情報を得て、教師、生徒ともに国際的な視野で進路を考える情報源として利用している。また、留学した生徒とのメール交換により留学希望者は海外教育機関などの情報を得ている。

保護者と高校をHPで結ぶ

高校でどんな指導を行っているか保護者に知ってもらうため、高校のHPに進路指導についての情報を載せている。HPを保護者に利用してもらえよう、保護者を対象にインターネット研修会も開いた。

社会人OBとメール交流

社会人を招いた講演会に向けて、その事前準備として、生徒にメールで講師との意見交換をさせておいた。従来はただ話を聞くだけになりがちの講演会だったが、当日の講演会では活発な質問が生徒から出るようになった。

るさまざまな職業人との触れ合いも大切である。そこで卒業生に協力を仰いで、メールングリストを作成し、高校生と社会人のメール交換の場にはどうだろう。社会人にとっても時間的制約が少なく、多業種の社会人との交流が可能になる。また、社会人とのメール交換のあとに職業に関する進路講演会を行えば、よりいっその意識醸成が期待できる。

自分の興味と リンクさせた 大学検索

自分の興味・関心、なりたいたい職業を踏まえて、生徒は大学・学部・学科研究を行うことになる。

調べたい大学・学部・学科が具体的に決まっていないう生徒に対しては、生徒の興味に関係するキーワードを基に

検索して出てきた各HPの中から、大学の教授やゼミが開いているHPを絞り込み、その大学についてさらに調べさせる。生徒の中には大学といえは一部の有名大学しか知らない者もいるかもしれない。そういった生徒には進路指導のスタートである「興味・関心」に立ち帰らせ、「興味のあるテーマでHPを検索して、それから『大学』というキーワードでさらに大学を絞り込んで『らん』といった指導が必要になる。自分がこれまで知らなかった大学でも、興味のある学問が学べる場合があることを理解させたい。

また、卒業生の合格体験記を既存のソフトを使ってデータベース化し、生徒がいつでも閲覧できるようにすることも、受験や大学進学への意識を高めていくのに効果的だ。

パソコン画面の動きやネット上の学習で高い定着度を獲得

高校の学習は、与えられた教材や問題そのまま覚えるというものでは十分な成果を得ることができない。高校では中学校のとき以上に、生徒には自分の頭で考え、積極的に学習内容に取り組み主体的な姿勢が求められる。

学習意欲を高めるためには、生徒自らが進路を考え、人生の目標を見つけていることがなにより大切だろう。しかしそれだけでなく、生徒が意欲的に学習に取り組み環境を整えることも重要な要素である。そして、実際の授業の中では学んだ内容の確実な理解と定着が目標であり、そのための工夫が求められる。

インターネットから生徒の関心の高い情報と、教科内容に近い関連情報を同時に引き出して提示することで、授業内容に興味を抱かせるきっかけ作りをしたり、大学教授などの学外の研究者との交流を行ったりすることが、従

来よりも容易になった。これは生徒の学習に対する意欲を喚起することに十分役立つと思われる。

また、教科書に準じた教材を基にした学習だけでなく、生徒自身が学習のきっかけを見つけて、積極的に授業に取り組み環境作りも行いたい。例えば、英作文の授業で海外の高校とメールの交換を行うのも一つの方法だ。生きた英語を知ると同時に、相手ともコミュニケーションしたいという気持ちで、英作文の学習における意欲的な姿勢を育てるだろう。

インターネットの特性を生かした刺激づけを行う

インターネットの持つグローバル性同時性も、生徒の教科に対する関心を高めることに利用できる。例えば、地歴公民の授業の前に、インターネットで得られた海外の最新ニュースをプリントして生徒に配付し、教室の中の生徒たちに世界の動きをリアルタイムに感じさせる。教科書とは違った、まさに生きた教材として、生徒に働きかけることができよう。

ネット上では、複数の高校が生物や公民などの共同研究を行うこともできる。これも通常の授業とは違った刺激

日常業務での活用

生徒情報の全校的管理で、教師の負担軽減と指導の充実を図る

一斉指導中心の従来型の指導から、生徒1人ひとりの状況に応じた個別指導へのシフト、生徒数の減少にもなう教員数の削減など、高校現場の置かれた状況の変化により、教師の校内業務の負担が今まで以上に増加している。導入によって、生徒情報の管理などにおいて、教師の校内業務の負担軽減、効率化を図ることができよう。さらに、業務の負担軽減から一歩踏み込み、より詳細な面談資料を作成するなど、得られた情報を2次加工することで、さらに効果的に生かす方法も追求できる。

づけが期待でき、生徒はほかの人といっしょに作業を行うことの難しさと言語を知ることができ、研究成果の発表会を行い、意見交換をすることも、インターネットの特性を生かせば比較的スムーズに行える。

最近、大学がHPに試験日、入試科目はもちろん、過去の入試問題を掲載したり、出願開始後に志願倍率（毎日数字が更新される）を載せたりすることもある。2年生の3学期ごろに、これらの入試情報に触れさせることで、「来年のこの時期には自分たちの入試が行われる」と実感させることも、学習の動機づけにつながるだろう。

情報の発信で理解をさらに深めていく

学習内容の理解・定着をより高める

パソコンを活用した高校の学習指導事例

有機化学のデータベースを構築

有機化学の教科書をHTMLで書き直し、海外の化学データベース、図書館などとリンクさせて、授業で使うデータベースを作った。生徒は学習の過程で必要な情報に容易に接することができるようになった。

植物の育成を観察

校内の樹木の育成を1年間通してデジタルカメラで撮影、パソコンに取り込んで樹木検索のソフトを作成。HPも作った。データの書き換え、追加が自由なので、継続的に内容を充実、発展させることができる。

遠隔操作で天体観測

天文台の大型望遠鏡をインターネットで遠隔操作し、授業中に観測した。ネットの同時性が実際に望遠鏡を動かしているという醍醐味を生み、通常の授業に刺激と新鮮さをもたらした。中には天文学そのものに興味を抱きはじめて生徒もいたという。

高校入試など、正確さが求められる業務にはパソコンが有効活用できる。願書の整理、入学者選抜作業、集計書類発送作業、教務への報告にいたるまでのデータ管理をパソコンで行うことで、業務がスムーズに行える。

定期テストなどの成績処理も、校内LAN（オフィスなどの限られた範囲に敷かれた情報通信網）で教員用のパソコンをつなげば、得られたデータを共有化できるだけでなく、一部の教師だけが業務を引き受ける環境から、全員が成績処理に参加する環境へと、校内の体制を整えることができ、異動の際もデータの引き継ぎが円滑に行える。

指導のあり方を検証する機会が得られる

成績管理は、パソコンを使って個々

ためのパソコンの利用法としては、例えば、数学などにおける抽象的概念の映像化（グラフ化、3Dによる立体化）がある。抽象を具象に置き換え、視覚に訴えることで生徒の理解を促すことができる。

また、課題研究などを行っている場合、学外の研究者（大学教授や大学生）に協力を求め、生徒が疑問を抱いたときに随時メールで質問できるような環境を作っておいてはどうだろう。情報を収集し、自分の力で一つずつ問題を解決していくプロセスを通して、生徒の課題に対する理解は確実に高まっていくはずだ。

課題発表の際はレジュメだけではなく、パソコン画面を用いながら視覚的に訴えるのもいいだろう。他者に自分のいいたいことを理解してもらおうには、まず本人がその内容をよく理解してい

の生徒の成績と生活状況、将来の志望などをリンクさせることで、学校独自の管理が可能となる。こうした情報をデータベース化して教師が共有化すれば、1人ひとりの生徒に対する理解が深まるばかりでなく、進級時における上級学年の担任への生徒の引き継ぎもスムーズになり、3か年の指導の一貫性を高めることにもつながる。

さらに定期検査や模擬試験の結果を学年ごとに分析し、データを毎年蓄積していけば、学校独自の成績推移の特徴を把握でき、3か年を見とおした学習指導計画の立案の際の参考になる。また、卒業生の成績推移表などを作成して、同じ大学を志望する生徒との面談で資料として活用することも可能だ。生徒を納得させ、やる気にさせるさまざまな資料がパソコンを使うことで、今までになく手軽に作れるのだ。

PCが生み出す新教育



パソコンを活用した高校の日常業務事例

負担軽減に効果

従来は各教師が個別に生徒の成績処理を行っていたが、校内LANで教師用のパソコンをつないで、さらに共通の成績処理ソフトを使うようにした。これによって、成績管理の作業を一元化でき、教師1人ひとりの作業量も減った。

校内情報をネット上で掲示

校内の情報共有化の推進の一環として、ネット上の掲示板で、研究会、セミナーのお知らせなどを公開するようにした。生徒の名簿のデータ化や図書館蔵書を検索できるデータベースとの連携も実現し、日常業務のペーパーレス化に近づいた。

市販ソフトで時間割を作成

時間割の作成は複雑で時間のかかる作業だが、市販の事務処理ソフトを活用して、時間割作成の効率化を図った。手作業と違い、一度基礎データを入力すると、次年度からは改訂を加えるだけで済んだ。

学校を開き 学外との交流を 図りながら進める 課題研究

近年、生徒に「課題研究」に取り組ませる高校が増えてきている。富山県立大門高校もその一つだが、同校がユニークなのは、パソコンを効果的に用いているという点である。

同校では、1年次の1学期には、全生徒が情報についての基礎的な学習に取り組み、そして同校には普通科の中に情報コースが設置されており、2年次から希望者がこの情報コースに進み、1学年約50人の生徒が学んでいる。「課題研究」を行っているのは、その情報コースの2年、3年の生徒たちだ。「課題研究」では、パソコンは生徒たちにとって情報を収集、加工し、他者へ伝えていくための重要なツールとなっている。

週1時間の「課題研究」の授業の中で、生徒たちは数学、化学、環境の3つのことだ。

「一番の利点は、インターネットを使うことによって、学校外との交流が広がるということです。富山大の教授とのメール交換も、インターネットなくしては考えられません。生徒たちの研究成果を載せたHPには、外部の方からのアクセスが結構あるんですよ。外部の方の意見を参考にし、さらに生徒が研究を深めていくこともできるようになります。また現在行っていないのですが、メールを活用して他校の生徒と共同研究をすることも可能ですよね」

ただし、インターネットを活用して「課題研究」などを行うっていく際には、配慮しなければならない点もあるようだ。

「これまでは教室という閉じた空間の中だけで授業をしていたわけですが、インターネットによって外部に開けばさまざまな声にさらされることとなります。特に社会的なテーマは、歴史観

分野の中から自分の好きなテーマを選び、2人から4人のグループに分かれてそれぞれ研究を開始する。例えば環境なら「ダイオキシン」、化学なら「大気中の酸素の割合」、数学なら「三平方の定理（ピタゴラスの定理）の証明」といったテーマが、生徒自身の関心に基いて選ばれる。

指導しているのは、数学と理科の教師。ただし3年生については理科の教師だけが指導にあたり、生徒が選択できるテーマは物理、化学、環境分野となる。1学期がテーマ設定の期間、夏休みと2学期は実験や観測をする期間、そして3学期が研究結果をまとめる期間にあてられる。

学外の 協力を生かした 指導を展開

1学期のテーマ設定の段階から、パソコンは活用されている。生徒たちは書籍や雑誌だけでなく、インターネットを用いて自分のテーマを探し出していく。例えば検索エンジンで「ダイオキシン」という単語を入力すれば、ダイオキシンについて書かれているHPを検索することができる。いろいろなHPを読みながら、今ながら問題になっていて、どんな研究が行われている

や価値観の違いによって、人それぞれ意見が異なりますからね。生徒の研究の成果などをインターネットで学外に発表しようとする際の、非常に大きな課題といえます」

画面の向こうの 他者に気づき 生徒が変わる

大門高校では「課題研究」以外でも、さまざまな場面でパソコンを活用している。例えば、2年生の英語（ライティング）の授業では、インターネットから最新のトピックを取り寄せ、それを生徒に読ませて感想を書かせるという試みを行っている。昨年は地球温暖化問題やダイアナ元皇太子妃の死去、今年はサッカーのワールドカップに関する情報が題材として取り上げられたという。英語科の奥野信一先生は、この取り組みのねらいについて次のように語る。

「題材が現在進行形のものであるが

かを生徒は把握し、その中から自分のテーマを見つけるわけだ」

2学期は、さまざまな実験や観測を繰り返す期間なので、パソコンはデータの集計などに使われる程度である。ただし、そんな中でも興味深い試みは行われている。昨年、水の漏れる速さやそのときの体積は、どのようにして決まるかという「水漏れシミュレーション」について調べたグループの研究は、富山大の教授とメールをやりとりしながら進められた。同校の情報国際部に所属する江守恒明先生はこう語る。

「生徒たちが研究に行き詰まったときに、大学の先生から『こんな考え方がある』とヒントを与えてもらうようにしたんです。生徒はそのヒントを基に研究を深めていきます。これまで生徒の指導は学校内の教師しかできませんでしたが、インターネットの登場で学外の方の協力も仰ぎながら指導できるようになりました」

そして3学期は、パソコンが最も活用される時期である。生徒たちの研究結果は、HPを通して外部に公表されることになる。そのため生徒たちはパソコンを使って、自分たちの研究成果を説明するための文章や図表作りに取り組み。

ために、まず生徒の関心の高さが違います。また、従来のライティングの授業だと、与えられた日本語をひたすら英語に直していくという作業が中心で、あまりおもしろみがありませんよね。そこで、資料を読んで自分の意見を書かせるという、本当の意味でのライティングの力がつく授業がしたかったんです」

また「電子メールを利用した読書会」も、昨年初めて開かれた。同校ではこれまで毎年読書会を開いてきたが、最近は生徒同士の意見交換も少なく、盛り上がり欠ける状況だったという。そこでまず、読書会に参加する生徒のメールアドレスを作成、生徒たちにはあらかじめ課題図書を読ませ、その感想をメールにして送るように指示した。メールは、各自が都合のいい時間に目を通し、つけ加えや反論もできるようにした。

「どの生徒も、あらかじめ自分の意見をまとめ、人の意見にも目を通したうえで出席するので、会は以前よりは活発なものになりました。それに人前ではうまくしゃべれないけれど、文章にするとうまく深い意見を出せる生徒が増えて、結構いるんですよ。彼らにとってもいい試みだったと思います。」（江守先生）

また2年生の生徒たちには「課題研究発表会」の場も設けられている。1グループ7分程度の時間が与えられ、生徒たちはプロジェクター、ビデオなど複数のメディアを駆使して、自分たちの研究の報告をする。プロジェクターはインターネットにも接続しており、発表中もさまざまな情報が取り出せるようになっている。

「複数のメディアを使った発表は、生徒のプレゼンテーション能力を高めるうえで大きな効果があります。プレゼンテーション能力は、大学での研究発表の場においても、また企業においても不可欠なものになってきていますからね」

交流を広げ 課題研究を さらに充実させる

江守先生は、生徒を「課題研究」に取り組ませることによって、「生徒が自分で設定した課題を、プロセスを追いながら一つひとつ解決していくことができるようになる」「粘り強く実験を繰り返したり、データを蓄積するなど、普段の授業では味わえない経験ができる」などの効果が期待できるという。さらに、パソコンを「課題研究」に用いることの効果もいくつか考えられる

このメールアドレスを用いて生徒同士が感想文を読み合おうという方法は、これからの読書感想文のあり方を考えるうえで興味深い。

「従来だと生徒の書いた感想文は、教師1人が読んでいました。しかしメールアドレスを使ってみんなが読むことになるので、必ずと書き手の緊張感も違ってくるはずですよ。つまり、他者が読むことを意識した文章を書くための非常にいいレッスンになるのではないのでしょうか。画面に1人で向かっているのと、どうしても独りよがり文章を書きがちですが、みんなが読んでいるといふ緊張感を持たせれば、生徒はやがてコンピュータの向こうにたくさん読者がいることに気づくはずですよ。」（江守先生）

パソコンは、利用のしかた次第では授業のスタイルを変えるだけでなく、教育の質そのものを、さらに向上させる可能性を秘めた、強力なツールであるといえそうです。



富山県立大門高校
江守恒明
昭和33年大阪府生まれ、
担当科目は化学。情報
国際部に所属。同校に
赴任して今年で2年目を迎える。

事例研究

山口県立

下関西高校

パソコンで生徒の状況を客観的に把握し、啓発し続ける

県下でも有数の進学校である下関西高校では、近年、人事異動などで教師の異動が激しくなった。これにより、生徒個々の実態を把握し、これまでの教育レベルを継承していくうえで、いろいろな課題が生じてきた。

「このため生徒の状況を教師が客観的に把握、検証する必要性が今まで以上に高まり、パソコンを活用した成績・模試分析を新たに始めたのです」と進路指導部の内田悟先生は語る。

同校では、まず定期考査の順位づけ、平均点の算出、苦手分野の確認をパソコンで行い、その入力済みデータを面談資料などの作成にも活用できるようにした。また、進研模試の分析に「Fine System」を利用、模試結果を生徒1人ひとりと、またクラス単位、学年単位、教科単位で、過去数回・数年の模

試の成績推移、各科目の分野別の弱点などを詳細に分析、把握している。

「客観的な成績分析により、学校の実態を把握し、各学年ごとに細かな指導方法、指導時期など、適切な指導方針を立てることができるようになりました。また、これを基に新しく赴任してこられた先生方も、自分独自の指導方法で授業を行えるようになりました」

このシステムは簡単に操作でき、教師の異動があっても恒久的に同等のデータを取り出して、分析・検討することができ、また、各教師が各々資料を作成していたところ比べると、教師の業務の負担も軽減し、教科研究にいつそ時間をかけることができるようになった。

パソコンの活用で、成績データをグラフや表の形でわかりやすく、詳細に提示できるが、これは教師の生徒把握だけでなく、生徒にとっても「今後なにをどれくらいがんばらないといけないのか」を実感するのに役立つ。

「本人の個人成績推移データなどを生徒に見せると、あどときはこの科目をがんばったからな、あどときはこの分野の勉強が足りなかったのかなとか、自分なりに振り返っているようです。学習指導で最も苦労するのは生徒をいかにやる気にさせるかですが、生

徒は思った以上にこの分析結果から啓発を受けているようです」

「自分」を知り、「必要なものはなに」かを具体的に把握できたことで、教師に対する生徒の質問も「この分野はどういう勉強をすればいいのですか」と一歩踏み込んだものになってきた。

生徒が使いやすい環境を作る

また、生徒は「Fine System」にリンクしている大学のHPで志望校はもちろぬ、他大学の教授の研究内容や就職状況なども調べるなど、自分に合った大学を積極的に探し始めた。「HPだけではわからないから大学に直接質問したい」といつ生徒も現れた。

同校では教師もインターネットを活用する。さまざまな時事問題をインターネットで情報検索し、生徒の学部・学科研究に関する質問に答え、アドバイスするための情報収集を行うのだ。

「生徒から進路の相談があったら、検索で見つけた記事を生徒に紹介するんです。生徒は『先生、よく知ってますね』なんていいいますけど、僕は『知っているんじゃないよ。こういうところを調べたからわかるんだよ』って答えます。すると、生徒は自分で調べ始

めるんです。ある程度、教師の側もインターネット上の体質を取っていないといけない。インターネットがあるから自由に使いなさい、では、教師は必要ないですよ。指導で一番大切なのは生徒の啓発なので、インターネットによる情報収集は生徒に好評で、「Fine System」が設置された進路資料室前の廊下に、順番待ちの生徒が並んでいるほどだ。

「生徒がパソコンを使っているすぐ隣に進路指導部の教師の部屋があるので、生徒はパソコンの使い方などすぐに教師に質問することができ、また、まじめな生徒ほど『パソコンを壊したらどうしよう』といった操作に対する不安を抱くので、教師は『壊れても修理してもらえばいいから、心配しないで思っ分使いなさい』と常に語りかけるようにしているんです」

パソコンを生徒に十分活用させるためのなげない配慮が、大きな成果につながっているのだ。



山口県立下関西高校
内田 悟
昭和35年山口県生まれ、担当教科は英語。同校へ赴任して8年目を迎える。進路指導部に所属して3年目。

事例研究

北海道

札幌国際情報高校

3か年を通じた成績データ管理で、業務負担を軽減、生きた資料を作る

札幌国際情報高校はこの春1期生が卒業したばかりの新しい高校だ。同校の進路指導部は、その1期生の進路状況を掲載した「平成10年度進路指導資料（1期生の追跡データから）」を作成生徒に配付した。これには卒業した各生徒の高校入試の成績から、入学直後の基礎テストの成績、各学年ごとの模試の平均点、センター試験での点数、各大学ごとの合否結果までの成績の推移が、名前を伏せたうえで、一覧表として掲載されている。

VIEW SPECIAL

PCが生み出す新教育



この資料を生徒は「高校入試の成績が悪くても、努力次第では志望校に合格できるんだ」「苦手の数学を克服すれば、僕も志望校に合格できるかも」などと、先輩と自分を重ね合わせながら読んでいく。

作業の省力化で教師の生の分析に重点を

進路指導部では担任の教師に、各生徒の成績の追跡データ、出席状況、所属部活動と取得資格、そして指導上の留意点を載せた資料を渡している。担任はその資料を参考にしながら、面談に臨んでいる。

「出欠席状況や所属部活動まで載せるのは、推薦入試を希望している生徒向けの指導のためです。本校は、国際情報高校」といつだけあって、情報教育部という分掌の教師が生徒の出欠席や住所などを、すべてパソコンに入力しているんです。だから情報は簡単に引き出すことができます」

だがコメントは、あくまでも手作業。進路指導部の荒田先生自身が、成績表や各教科担当の意見を参考にしながら「受験する大学、学部の数をもつ少し増やした方がいいのでは」「数学を受験科目から外すのはやめた方がいい」など、一つひとつ丁寧に書き込んでいく。

「パソコンがいくら発達しても、手作業の部分は残ります。むしろパソコン活用で時間短縮ができた分だけ、教師自身による分析に時間をかけなくてはいいけません。今後は担任や各教科の担当と話し合いながら、教師や生徒にとって参考になる、生きた資料作りをしていきたいと思っています」

インターネットの可能性を追求する教師たち



「東海スクールネット研究会」は、インターネットの教育への利用について関心のある小学校から大学までの教育関係者によって創立された、インターネットの教育への利用に関心のある人ならだれでも参加できる。

主な活動は、隔月の学習会、実践報告会のほか、インターネットの利用の技術的な質疑応答、授業や学校での利用の報告、ビデオ会議の方法などに関する、メーリングリストを使った会員同士の日常的な情報交換だ。

去る7月4日には、台湾、ハワイ、ドイツから教育関係者を招いた国際会議「Schoolnet Conference 98 in Nagoya」を開催、世界各地での動向を知るとともに、今後の教育用インターネット利用についての意見交換を行った（写真）

また、同会ではインターネットを利用した自立型広域学習環境創造の企画を既にスタートさせている。これは東海地域、北海道、沖縄の各地でテーマ別に生徒が学校を越えて交流、共同活動、学習する環境を創造していくというもの。現在、生徒会交流、留学生との交流、コンピュータをテーマにしたメーリングリスト、e-HPを利用した新聞作りのメーリングリストが各地でスタートしている。

編集部では今月の特集について先の方の意見、反論・悩みなどをお待ちしています。巻末寄書、またはEメールで編集部に送ってください。また、アドレス：view21@mail.benesse.co.jp